

宮沢賢治の方法

——『春と修羅』を軸に——

長野 隆

宮沢賢治にとってもまた「生」は孤独の受感でしかなかった。しかしそれは多くの詩人のように、と言ってしまふわけには行かない。この人の孤独には月並の悲哀がなく、まして憤怒など探し出しようがない。私たちの気付かぬところで恐ろしく生真面目に実現された何かであるに違いないのだが、定義を与えることが作品の聖域に踏み込むようで、手がつけられない。いま私に許されるのは、一人の人間の異常な情熱が、一般の約束とは表裏する順路をたどってその未踏の形成に行きついたであろうことを、仮説を立てることによって作品の場に引き戻すことである。

◇

◇

宮沢賢治の孤独は、いわば身体を一つの限界領域と感ずることの孤独である。この肉体は私独りにしか所有されず他の何ものとも親和できぬか、これが彼の痛恨の認識である。しかし一度彼がそこから再出発し世界と関ることができていたなら、彼のような孤独は初めから無かったのである。つまり、彼はこれを許さなかった。皮肉にも孤独を知ることがなかった彼の実践的観念そのものが、彼にこのような孤独を演ぜしめたのである。孤独な

のは観念であるということに気付いていれば、多くの詩人たちのように、同じような孤独を肉体とともに生きることができただろう。しかるに賢治の場合は、実践的観念というものが信仰のように健全であり堅牢であった。信頼と希望が多くの明瞭な理會を約束させるように、彼の観念の方は彼の要求に基づいて世界と親和できる。このような実感から、彼がいたたまれずに肉体の限界をかえりみた様を想像してみよう。

こゝらの句のいふぶきのなかで

なにとはなしに聖いところもちがして

凍えそうになりながらいつまでもいつまでも

いつたり来たりしてゐました。

(「小岩井農場パート九」)

信仰であり愛であり、光を浴びる者が振返るのは常に卑小な肉体というものである。ここではそれが、大きくすぎる観念をもてあまして、全く釣合いを失っているかのようなものである。通常私たちはつましくこの限界を受けけるものだ。常人の理解では、己が小さな軀を抱きしめることによって天上へと視線を仰ぐのである。実践上の愛の形などもおおむね肉体に対する憐憫の情が付添うものだが、賢治文学にはそれがない。とどのつまり彼の特異な情熱は、肉体の限りなき親和を願望することによって、反って肉体の限界から眼をそむけるという現実に着する。作品の中で肉体は常に置去りにされている。願望が図らずも肉体に強いる試練として、肉体は常に期待を裏切りその限界を訴えてやまぬかのようなのである。彼の情熱がそうさせる。そして、これが賢治の文学の方法を基底づけているに違いないのだ。誤解を恐れずに言えば、このような理法に則った彼の作品には、したがって人間の(彼自身の)肉体に対する愛憐が欠落しているのである。一種の孤独の痛みや哀傷は、彼が見捨てた軀を私たち

が代って探し出そうとする、いわばこちら側の喪失体験として読者が作品に与える「意味」である。比喩的に言えば、氷のようなものを握りしめることによって反って己れの手のぬくもりを感じてしまうような体験——意味なのである。だから、このような私たちの関り方を冷たく斥ければ、やはり作品は、あの恐ろしく孤独な原形質的な郷愁のようなものを訴えつづけることを止めないだろう。この体験は、極めて本質的と言わねばならない。

賢治文学のこうした孤独は、人間とか存在とかいったものが広く世界や社会との関わりの中に軋轢を生み、そこで相対化される観念から発せられるものではないから、したがって人間一般の通俗的懷疑もそこからは生まれない。彼が懷疑するのは、絶対的な自我が相対的に卑小ならざるを得ぬ肉体といかにして共生できるか、という難問についてである。この解決が賢治の積極的な祈念であれば、そこから生まれる信仰も、必然的に肉体の親和という理念に向けて歩み出すこととなる。

この不可思議な大きな心象宇宙のなかで

もしも正しいねがひに燃えて

じぶんとひとと万象といつしよに

至上福しにいたらうとする

それがある宗教情操とするならば

そのねがひから砕けまたは疲れ

じぶんとそれからたつたもひとつのたましひと

完全そして永久にどこまでもいつしよに行かうとする

この変態を恋愛といふ

(「小岩井農場パート九」)

この有名な一節は、賢治文学追跡の重要な糸口を提供しているものだけに迂闊に取扱うことをためらうが、やはり私は、通常とは異った意味で、「聖人」の並でない信念を嗅ぎとる。というのも、これにつづく次の部分、

そしてどこまでもその方向では

決して求め得られないその恋愛の本質的な部分を

むりにごまかし求め得やうとする

この傾向を性欲といふ

にあらわれる、恋愛への執拗な偏向と、いわばその不感症性を指摘しておきたいのである。これは健全な意味での宗教的情操だけとは決して言えない。いわゆる禁欲思想のあらわれなどでは元よりない。否、禁欲思想であるといえど一応そうであるには違いないのだが、そう言ってしまうと、どこか根本的なところを踏み違えてしまうような気がしてならない。「その方向では」決して求め得られないその恋愛の本質的な部分を／むりにごまかし求め得やうと……云々」というのが、しごく難解なのである。引用の前半部において、「正しいねがひに燃え」た者が、その意欲を全うできず、有限でしかありえない人間のあるがままの姿を再確認する場が恋愛という対幻想であることを知ったなら、常人の聖者感覚では、せめて与えられたその対なる幻想を可能なかぎり穢れなく正しくはぐくむべきことを知るはずである。つまりこの「変態」とやらが出来ることなら「宗教情操」(アガペー)に添うべくあらんことを願うのである。しかるに、それにつづく引用の後半部を見ると、賢治は奇態にもそのようには傾斜して行かない。彼が「その方向」に見出すのが「性欲」(エロス)であるというのは、いかにしても強引で残酷な人間認識である。かかる論理コードから引き出せるのは、とどのつまり「じぶん」とひとと万象といっし

よに／至上福しにいたらうとする」者は何ものも所有できない、或いは所有してはならない、という極限的現実ということになる。ということはすなわち、この強引なつじつまを満足させる裏側の意味は、そのような「正しいねがひ」の実現とは要するにすべての肉体（物質）を所有すること（或いはすべてのものと肉体的に親和すること）であるという、執拗に観念的な視角の提示なのである。でなければ、「正しいねがひに燃え」て「至上福しにいたらうとする」者の挫折の経路が「恋愛」から勢い「性欲」に結びついて行くというのは、表現としての意味を持たぬほどとるに足りないのだ。先に私が難解であると言ったのはこのあたりのことを言ったものだ。そうすると、賢治が妹トシに寄せた恋情の如きは、「肉親」という自明の関係を所有し得たことへの率直な喜びと驚きとを伝えるものであって、かかる「交感」の共有こそ、彼の現実として正にあるべきものであったと言い換えられる。それだけに妹との離別が非情な喪失体験として彼の観念を暗く遮蔽したことは間違いない。二人の間にあったのは、やはり肉親の決定的な絆であって、よく言われる恋（エロス）などであろうはずもないのだ。

さて、以上のように見て行くと、賢治の作品を包みこんでいる一種の透명한唯心性は、あたかも逆立ちした唯物史観のようにして表象されていることに気付くのである。肉体の不在は、いわば彼の教義の徹底によって逆理的に立ちあらわれた現象であった。そこに官能が欠如するのは問うべくもない。

私は、今更賢治の「神話」を崩そうなどとは思ってもいない。ただ、彼の徹底して被虐的な折り々のようなものに、或る特異な性質を認めないわけには行かないだけである。イメージとしての四次元宇宙が、何か彼のほうもなく生真面目な別の情熱によって、ちょうど錬金術師の素朴な信念のようなもののあらわれとして構築されて行ったのではないかと考えているだけなのである。

それでは賢治は、この不可能な要求、すなわち肉体の無限な親和という困難なイデーをどのようにして体現化して行つたか。それは恐らく彼自身も積極的には意識せぬところで表現の上に意匠化されて行つた独自のものがあつた。つまりその方法とは、肉体（物質）を、その構成要素である分子記号にまで還元することによって、「個」の宿命の限界を破ることであつた。それは、例えば、

わたくしはこんな過透明な景色のなかに

松倉山や五間森荒つばい石英安山岩の岩頭から

放たれた剽悍な刺客に

暗殺されてもいいのです

（「風景とオルゴール」）

というような、賢治文学の主要モチーフである「死」の方法であり、また、

あたらしくそらに息つけば

はの白く肺はちぢまり

（このからだそらのみちんにちらばれ）

（「春と修羅」）

という、肉体の「拡散」の方法であり、

もちろん農夫はからだ半分ぐらゐ

木だちやそこらの銀のアトムに溶け

またじぶんでも溶けてもいいとおもひながら

（「風景とオルゴール」）

という「溶解」であり、或いは、